

令和元年度(2019年度)高等学校OPENプロジェクト実施報告書(2年次)

研究指定校	北海道小樽未来創造高等学校	教育局	後志教育局
-------	---------------	-----	-------

1 研究主題	
地域観光の活性化 ～ホンモノの小樽にふれあう～	
2 研究実践内容	
月	実施内容
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次流通マネジメント科40名、情報会計マネジメント科40名の生徒が、科目「ビジネス基礎」の授業で、タブレットや自動翻訳機を活用しながら、訪日外国人観光客と外国語での基本的なコミュニケーションを図った。 ・2年次流通マネジメント5名の生徒が、科目「広告と販売促進」の授業で、外国人観光客への「お茶会」宣伝を目的としたPOP広告を作成し、イベント会場に掲示した。 ・1年次流通マネジメント科40名、情報会計マネジメント科40名の生徒が、科目「ビジネス基礎」の授業で、小樽市堺町通り「利尻屋みのや・小樽歴史館」において「お茶会」を開催し、2日間で訪日外国人観光客200名に体験型アクティビティの提供による日本文化の紹介を行った。
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次全生徒160名が、「総合的な探究の時間」で、おたる潮まつり実行委員会が主催する地域の観光イベント「第53回おたる潮まつり」の「潮ねりこみ」に参加するため、振り付けの創始者である藤間扇玉会の会主を外部講師として「ねりこみ」の練習を実施した。
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次流通マネジメント科39名、2年次情報会計マネジメント科35名の生徒が科目「マーケティング」「観光一般」の授業で、「小樽雪あかりの路」で配布する缶バッジのデザインを考案し、作成した。 ・1年次全生徒158名が「総合的な探究の時間」で、「小樽雪あかりの路」実行委員会が主催する地域の観光イベント「小樽雪あかりの路」に参加するため、紙コップローソクを作成した。また、機械電気システム科40名、建設システム科39名の生徒が、イベント会場に滑り台や雪のオブジェを製作するとともに、流通マネジメント科39名、情報会計マネジメント科40名の生徒が本校正門前にライトアップの会場設営を行った。 ・1年次流通マネジメント科の生徒39名が、科目「マーケティング」で、「小樽雪あかりの路」等における活動状況についてグループ討議を行い、「地域みらい連携会議」の委員がその様子を参観した。 ・2年次流通マネジメント40名、情報会計マネジメント科35名の生徒を対象に、科目「観光一般」の授業で、小樽観光大学の総務部長を外部講師として「おたる案内人検定」の講演会を実施した。

3 地域みらい連携会議の開催内容

第 1 回	令和元年7月17日（水）13:45～15:00
出席者	蓑谷修委員、井上晃委員、王力勇委員、船橋亜湖委員（代理） 新田清文委員（代理）
協議内容	<ul style="list-style-type: none"> ・OPENプロジェクト2年目の年間計画及び概要の説明 ・「お茶会」の取組状況の報告
指導・助言を受けた内容	<ul style="list-style-type: none"> ・小樽市が現在に至るまでの経緯や正しい歴史的な背景を教員側が認識した上で、生徒への指導を行わなければならない。 ・日本遺産の活用は、地元住民が小樽の価値を正しく認識し、郷土愛を深めるためのきっかけとしてもらいたい。
第 2 回	令和元年12月18日（水）13:45～15:00
出席者	蓑谷修委員、井上晃委員、王力勇委員、中村寿春委員 新田清文委員（代理）
協議内容	<ul style="list-style-type: none"> ・全道フォーラム中間報告会の発表 ・次年度に向けた課題の報告
指導・助言を受けた内容	<ul style="list-style-type: none"> ・小樽商科大学や民間企業、観光協会などの外部団体との連携を積極的に取り組むことが望ましい。 ・観光客の意識調査等のアンケート集計などは、行政や外部団体が所持している既存のデータを有効活用することができる。
第 3 回	令和2年2月18日（火）10:45～12:00
出席者	蓑谷修委員、井上晃委員、船橋亜湖委員（代理）
協議内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「小樽雪あかりの路」を含めた活動状況の討議（授業公開） ・今年度の活動及び課題の報告
指導・助言を受けた内容	<ul style="list-style-type: none"> ・小樽の価値に対して、関心が薄い市民が非常に多い。観光客が暑い夏の「潮まつり」や寒い冬の「雪あかりの路」に来訪している理由について、踏み込んで考えてみることで課題解決のヒントとなる。 ・小樽市民の大部分は、現状の経済危機に対して、危機感を持たず、行政に任せきりの傾向のため、観光を通じて歴史や文化などに興味を持たせることで、市民の意識向上につながる取組は非常に重要である。

4 研究の成果と課題

(1) 目的の達成状況

- 実践研究では、校外活動を積極的に進めた結果、コミュニケーション能力及び自発的な活動意欲の向上の必要性に対する生徒の認識が高まった。
- 地元の外部団体が主催する校外活動に生徒が自主的に参加するなど、実践研究における活動の経験を通して、地元産業の活性化を視野に入れたリーダーの育成を進めることができた。

(2) 目標の達成状況

- 訪日外国人観光客とのコミュニケーション活動後に実施したアンケートでは、「外国語を身に付けたいか」との設問に対し、「外国語を身に付けたい」と答えた生徒が英語、韓国語、中国語の3カ国を合わせると93.5%に上昇するなど、活動を通して、地元企業が求める外国語によるコミュニケーションが可能な人材育成に向けた意識の醸成を図ることができた。
- 生徒が、小樽の歴史的背景や現在に至るまでの経緯を学ぶことで、地域社会における観光産業の役割を理解し、地方創生に必要な資質・能力を身に付けることができた。
- 小樽が北海道の発展に果たした役割について、日本遺産を題材とした授業の中で「北前船を活用した商品開発を考えたい」などの積極的な発言が生徒から出てくるようになり、アンケートにおける「地元である小樽が好きか」という設問では、授業前の約20%から、授業後は92%に向上した。

(3) 実践研究の規模

- 1年次を対象とした活動を、「総合的な探究の時間」で実施したことにより、商業科に留まらず、工業科を含めた年次規模で実施することができた。また、英語科との連携を図るなど、教科等横断的な取組を充実させることができた。
- 1年次を中心とした取組であったことから、他年次との横断的な連携を図るなど、全校的な取組にするために校内体制を構築する必要がある。

(4) 研究成果の普及

- 活動内容は、学校のwebページやFacebookに掲載した。また、北海道新聞や地元情報誌（小樽ジャーナル）に取材依頼を行い、活動内容を広く地域に発信した。

(5) 実践研究内容

- 6月に実施した「お茶会」では、訪日外国人観光客とのコミュニケーションにおいて「まったく取れなかった」と回答した生徒が、昨年度の8.8%から6.5%に減少した。また、90%を超える生徒がコミュニケーションに対して、一定の成果を実感することができた。
- 7月に参加した「潮ねりこみ」では、学科の枠を超えた全校体制での参加を実現することができた。実行委員会や他の参加団体からは、昨年度からの参加体制の維持や建設科が作成した山車の追加など、本校の取組に対して、一定の評価を得ることができた。
- 11月に実施を予定していた「しゃこ祭」は、歴史的な不漁の影響もあり、開催11年目にして、初の開催中止となった。次年度以降の開催も現時点では未定であるため、実行委員会と連携を取りながら、判断の推移を見守っていく予定である。

- 2月に実施した「雪あかりの路」では、本校正門前のライトアップに加え、工業科が中心となって、滑り台や雪像の製作に取り組んだ。実施後の生徒のアンケートでは「地元行事の活性化につながった」と回答した生徒が90%、「次年度以降も継続して実施した方が良い」と回答した生徒が92%を占めた。
- 「雪あかりの路」については、昨年に引き続き、小樽の観光をテーマとした作品をプロジェクションマッピングで上映したところ、地域住民や見学に来た観光客から、次年度以降も実施を要望されるなど、本校の取組に対する地域の理解が深まった。

(6) 地域みらい連携会議

- 小樽市の経済状況や、発展から衰退に関連する文化を通じた歴史的な価値を把握する上での題材や視点の持ち方についての助言を得たことから、効果的なアプローチを用いて実践研究を進めることができた。
- 会議の開催時期については、実践研究の進捗状況を踏まえ、柔軟に設定する必要がある。

5 プロジェクトの達成状況

(1) [評価の観点] 本道の基幹産業を支える人材や、地域を守り支えていく人材の育成について

(評価)

学校全体として、本道の基幹産業や地域を支える人材の育成につながった取組となった。

(評価した理由)

- ・年度末に生徒を対象とした活動内容に関するアンケートを集約したところ、「次年度に向けて活動を継続したい」と答えた生徒が92%となり、問題解決に向けた取組を肯定的に捉えている生徒の割合が増えたため。
- ・「ビジネス基礎」で学んだ訪日外国人観光客に対するコミュニケーションスキルが実際に一定のレベルで活用できたと実感できたことが、生徒の自信につながった。また、外国語に対する必要性を実感し、英語・韓国語・中国語の習得を希望する生徒が増加したため。

(2) [評価の観点] 地域の自治体や企業、産業界等の関係機関との協働について

(評価)

地域の自治体や企業、産業界等の関係機関と協働した取組を実施し、成果や課題を共有している。

(評価した理由)

- ・小樽観光協会、小樽市港湾部、小樽高等支援学校などの外部団体と連携、協力体制を構築することができたため。
- ・小樽観光協会から、主催イベントへの協力を求められるなど、OPENプロジェクトの協力依頼に留まらず、相互依存を行える関係となったため。

(3) [評価の観点] 生徒の主体性について

(評価)

生徒は、指示の範囲で主体性を持って取り組むことができている。

(理由)

- ・1年次を中心とした活動のため、活動の成否や自分の役割及び業務に対して、責任を持って行動しようとする意識が強く反映されていたため。
- ・生徒は、自分が担当した役割の範囲内では、主体的に考え行動することができていたため。

(4) [評価の観点] 地域課題の解決状況について

(評価)

地域課題を把握し、取り組んだだけに留まっている。

(理由)

- ・小樽市における構造的な問題は、歴史的な背景を含めて、様々な要因が相互に関連しているため、単独の課題として効果的な対策を構築することが困難な現状である。そのため、関係機関と連携を取りながら活動内容に対する助言を得ているため。
- ・企業向けのアンケートを、次年度に実施することとなったため。

6 今後の取組

- ・本校の取組を、実社会での活動と効果的に関連付けるために、より実践的な環境を構築する。
- ・「おたる案内人」のボランティア団体と連携し、本校生徒が実際にガイドを体験学習するなど、観光ガイドの実践経験の機会を確保する。
- ・企業アンケートや観光客への意識調査アンケートの実施に向けて、クラウドによる集計作業の環境を構築する。
- ・運営指導委員会に、訪日外国人観光客とのコミュニケーション活動の充実（特に中国語及び韓国語）に向けて協力が得られる関係機関について助言いただく。

7 参考資料

(1) 「北前船の発表準備」 北海道新聞 10月17日



北前船の学習の成果として、北前船フォーラムに生徒代表者が発表した。

(2) 「雪あかりの路」 北海道新聞 2月8日



雪あかりの路に参加し、生徒が作成した紙コップのローソクや、プロジェクションマッピングを実施した。

(3) 外国人観光客へおもてなし！ 小樽ジャーナル 6月26日

北海道小樽未来創造高等学校1年生と、北海道小樽高等支援学校2年生が協力して、外

国人観光客を対象に、日本文化を楽しんでもらおうと、6月25日(火)・26日(水)10:00～15:00、堺町通りにある利尻屋みのや小樽歴史館でお茶会を開いている。

この取り組みは、2007(平成19)年から、小樽を訪れる外国人観光客に日本の文化に触れてもらおうと始められた。複数回実施した年もあり、今回で16回目となった。

地元の教育機関と連携して、校外で教育活動発表を積極的に実施。外国人観光客に日本文化に親んでもらい、寛ぎの場を提供するおもてなしを行い、地域に貢献することが目的としている。

未来創造高校流通マネジメント科1年生40名は、お茶会を知らせる係やアンケートをとる係・通行人をカウントする係に分かれ、それぞれの持ち場で堺町通りに観光に訪れた外国人観光客に英語で話しかけ、学んできたことを現場で体験した。

会場を訪れた観光客に、英語で日本文化を説明し、箏4面で「さくらさくら」と「荒城の月」を演奏。茶道部によるお点前が披露され、淹れたての茶とまんじゅうを振舞った。

高等支援学校生活技術科2年生は、紙やガラスの素材を使った製品の製造等の授業で、牛乳パックを再利用して紙を漉いて懐紙200枚を作った。茶会の和菓子を載せる懐紙に使ってもらおうと協力した。

26日に同生徒6名と教員らが会場を訪れ、代表の生徒は「牛乳パックをリサイクルしてお茶会に向けて一生懸命に作った。自分達が作った懐紙が使われるところを見られると楽しみにして来た」と挨拶して、未来創造高校の生徒に手渡した。

会場には、イギリスから11日間自転車と共に来道した男女6名が、箏の音色に耳を澄まして茶を味わい、けん玉に夢中になるなど、日本文化を楽しんでいた。

午前中の同通りには、外国人観光客が少ないこともあり、思うように実践することができない場面もあったが、勉強した通り英語で語りかけ、アンケートに協力してもらい、お茶会会場に招いたり緊張しながらも笑顔で対応していた。

女生徒の1人は、「話かけたが、言葉が通じないので説明するのが難しい」と話し、他の女生徒も「初めてなので、緊張する」と話し、勇気を出して話しかけていた。

初日の25日は、同校情報会計マネジメント科40名が参加して、外国人観光客80名が茶会を楽しんだ。本日は120人を見込んでいる。



(4) 潮ねりこみの山車を建設科の生徒が作成 小樽ジャーナル 7月23日

北海道小樽未来創造高等学校建設科の生徒2名と担当教諭は、潮ねりこみに参加する梯団を華やかに彩る山車を、手づくりして完成させ、7月23日(火)にお披露目した。

日頃からものづくりに携わる同科に山車の依頼があり、課題研究の時間を活用して、同科3年の竹井祐人さんと宮下剛輝さんが、担当の押切吉紀教諭の指導の下、5月のGW後から、運びやすいように組み立て式の山車制作に取り組んだ。

アイデアを出し合い、意見をまとめるまでにも時間がかかったが、高さ1m82cm・横1m40cmと1m82cmの扉付きの組み立て式の山車を制作。

祭りらしさを出すために、色の違う提灯を飾り、昨年の文化祭でうちわに使用した商業科の1年生が描いた天狗の絵を側面に使い、反対面に未来創造高校の文字と校章を描いた。

トラックの荷台に載せ、7月27日(土)に実施の潮まつりのねりこみに、山車として、同校梯団「小樽未来ひろげ隊」200名とともに町を練り歩く。

竹井さんは、「90点の出来。残りの10点は、来年、後輩がこの山車を受け継ぎ、さらに手を加え、100点にしてもらいたい」と話し、宮下さんは「提灯に電気を点けたり、電気・建設・機械・商業など、すべての学科が山車に関わることで、この学校の強さが出てくる」と期待した。この山車は、後輩が引き継ぎ、年々バージョンアップさせ、卒業後も山車を見ることが、祭りの楽しみになるそうだ。

押切教諭は、「この形になる前に、案が色々出たが、2人の考えがまとまった。そこで部品も少なくい方法で、簡単に組み立てができるよう完成させた。なにより楽しそうに制作していた」と話した。

